

## 2015 年度インタビュー課題レポート

橋本ゼミ三年 真野友華

### ・インタビューさせていただいた方

NPO 法人北海道レインボー・リソースセンター L-port 工藤さん他、全三名

ホームページ : <http://www.l-port.org/>

### ・質問内容、回答

事前に 10 個の質問項目をメールで送付させていただき、その質問書にもとづいてインタビューを行った。

#### ① L-port の主な活動内容はどのようなものですか。

主にセクシュアル・マイノリティの方からの相談受付。加えて、セクシュアル・マイノリティ関連の政策に関する行政へ向けた提言など。

#### ② ホームページにある相談ダイヤルでの電話相談、メールの月件数はどのくらいですか。

L-port では、ホームページのメールフォームに加え、毎月第一木曜日に電話相談を受け付けている。件数は月によってまちまちではあるが少ないときは一桁台、多いときは数十件にも及ぶ。札幌にはそういった人権などに関する総合的な相談窓口はあるものの、セクシュアル・マイノリティについて専門で扱ってくれる場所はない。デリケートな問題であるため、当事者、または事情をよく把握している人に相談できる場所というのは重要になってくる。

もっと言えば、日本は人権の意識が低いという印象。世界の、いわゆる先進国においてはセクシュアル・マイノリティの問題は長年議論されてきているテーマであるのに、日本においてはほとんど議論が深まっていない。世界の流れと連動していないように見える。よくあるのが「趣味の問題」「性癖の問題」として片づけられてしまうことである。性的少数者、という字面から想像されるのがまず同性と性行為する“性癖”を持っている、というイメージになってしまっており、あくまで個人の趣味の問題で、人権問題として扱われることがない。個人の好みなのだから、好きにすればよいという文脈でとらえられてしまうことが多い。

#### ③ L-port 設立のきっかけのようなものはありますか。

2011 年に発生した東日本大震災の際、被災地では当事者でなければ分からないような問題（具体的には、家族という証明が出来ずにパートナーと一緒に救急車に乗れない、遺品を引き取ることが出来ない、所在の分からないパートナーを探したいなど）が多く発生していた。問題解決のために全国のボランティア団体などへ呼びかけがなされ、工藤さん自身も当事者として長年活動していた経緯から、ボランティアへの誘いを受けて被災地で支援活動を行うことになった。当時は支援活動から一歩引いていたが、相談に乗ることならば可能な

のではないかとということで L-port を設立。

- ④ 札幌市は、昔からレインボーマーチが開催されるなど比較的性的少数者に対して寛容な町であると聞きましたが、実感としてはどうですか。

2015年5月まで札幌市の市長を務めていた上田文雄氏は、日本で初めてセクシャルマイノリティのイベントへ積極的に関わった首長であった。イベントへの応援メッセージを寄せてくださったり、当日もスピーチを行ってくださったりと強い関心が見られた。そこからトップダウン的に札幌の行政にも理解が広まっていくのではないかと期待も高まったが、実際は特に変わらなかった。全体的に北海道や札幌市の行政は受け身である印象がある。市としては、世論の変化が起き次第動くというスタンスであり、自発的なかわりは全くないと言って良い。イベントの協賛を申し込めば OK してくれるが、あくまで申請されたことに応える、という形である。大阪府の淀川区を代表として、自治体全体で取り組んでいる場所もあることにはあるが、日本全体で見るとまだまだ少ない。

- ⑤ セクシュアル・マイノリティ支援の団体や啓発運動などの主体は、その当事者の方々がほとんどであるというイメージがあるのですが、L-port で活動されている方々はどのような方々なのですか。

L-port の支援者には当事者だけでなく、「アライ」と呼ばれるセクシャルマイノリティではないが理解のある人もいる。昔は、活動する人と言えばセクシュアル・マイノリティの当事者ばかりだったが、最近では異性愛者の支援者も増えてきている。そうした当事者以外の存在はとても大きい。セクシュアル・マイノリティの人々が日常生活で主に関わるのはマジョリティである異性愛者であり、それらの人々がセクシュアル・マイノリティである自分に対してどのように思っているのかということに敏感な人も多いため、アライの支援者からの「素敵だね」「変じゃない」という言葉が不安を和らげてくれる面もある。

- ⑥ 渋谷区の同性パートナーシップ条例制定を筆頭に、だんだんと日本でもセクシュアル・マイノリティの方々への関心が高まっている今の状況に関して、どのように思っていますか。

外圧の影響が大きいと思う。2020年の東京オリンピック開催決定に向けた行政からの対策であるという見方をしている。オリンピックの開催都市に選ばれる条件として、セクシュアル・マイノリティなどへの差別がある国では開催しないというものがあることが大きい。勿論外圧がきっかけであるために本質的な解決にはなっていないが、これに伴う世論の高まりは歓迎すべきことであり、より議論が深まれば日本に適したセクシュアル・マイノリティの制度がつくられていくきっかけにもなるのではないかと。その第一歩として、パートナーシップ条例の制定は評価できる。

⑦ セクシュアル・マイノリティであることに関連して、日常生活で困ったり不安だったりすること、また嬉しかったりすることはどのようなことですか。

日常生活でジェンダーが強い固定観念として現われる場面は少なくない。例えばトイレに入る時などが挙げられる。職場では自分のオフィスがある階以外のトイレが使えなかったり、人目を気にして入らなければならなかったりするなど、小さなことだがストレスにつながる。また、不動産屋で部屋を借りるときにも、見た目が同性同士であると、パートナーだと伝えても通らずに部屋を借りられないこともある。説明するとしても、何か所も不動産屋を回るような場合には、プライベートなことについていちいち説明しなくてはならない状況に追い込まれてしまう。加えて法的なパートナーとしての証明がないため、家や土地などの共通財産を持つことが出来ない。設立のきっかけの部分で少し触れたが、パートナーが事故に巻き込まれた際に救急車に乗れなかったり、病院で面会させてもらえなかったりすることもある。男女間では事実婚などで納得してもらえる面もあるが、見た目が同性同士であると怪訝に思われることが多い。

総合して、今の日本にセクシュアル・マイノリティにそぐう制度や決まりは一つもない、というのが当事者の実感。そうしたストレスフルな生活によって、うつ病にかかってしまう人も少なくない。日常生活において同じような状況にいる当事者に会える確率が少ないことも、心細さの一因になっている。普通に接しているだけではセクシュアル・マイノリティであるか否かは分からないため、こうした悩みを共有できる場所がなく、自分で抱え込むしかなくなってしまう。背景にこうした事情があることから、パレードやイベントなどでセクシュアル・マイノリティ同士会う機会があったときの嬉しさや楽しさは計り知れないものがある。

ただ、セクシュアル・マイノリティでいてよかったと思うことも確かにある。人権について深く考える機会を得られたこと異性愛者として生まれたならば考えなかったような権利や差別について考えたり、また「夫と妻で良い家庭を作る」「子どもを育てる」など、世間一般的な幸せから良くも悪くも外れたことにより幸せとは何か、ということについても考える機会を得られたりしたのはよかった。また、今の仲間や支援者の人々とも、異性愛者であれば会えることはなかっただろう。

さらに、セックスについての話を共有できたということもよかったことの一つ。今の日本では、必要な知識でさえあまり口に出してはいけないことのように扱われているが、そうしたことについてしっかり情報の共有が出来ている点では、むしろ異性愛者よりも恵まれているのではないかと感じる。例えば、支援活動の中ではエイズなどについても取り扱うことがあるが、性行為によって感染する病気を防いだり望まない妊娠を防いだりするためのコンドーム携帯は海外においては普通のマナーであり、良いこととされる。それなのに、日本ではなんとなくそれが恥ずかしいことであるかのような風潮がある。セクシュアル・マイノリティとして異性愛者ではなかなかタッチしにくい問題に触れることで、そういったおかしな誤差が

あることを知ることが出来ている。

日本の政府はかつて薬害エイズ感染者を隠ぺいするために、アメリカ在住の同性愛者の男性を日本人のエイズ感染者第一号として発表したことがある。そのためにエイズが同性愛者の病気であるという誤った認識、ひいてはエイズが広まったのがあたかも同性愛者のせいであるかのような情報が世間に蔓延してしまった。セクシュアル・マイノリティの立場にいる人々にとって、その政府による誤情報の蔓延は現実的な切羽詰まった危機として身近にあった。自分達の汚点を隠すため、弱い立場にあるものにすべて責任を被せるというようなことが本当にあるのだ、という学びから、生きるために戦うということがどうということなのか分かったことも、セクシュアル・マイノリティという立場から得られたものである。

- ⑧ バラエティ番組のオネエタレントや、いわゆる「BL」「百合」など、現在セクシュアル・マイノリティに接する機会は現実よりもステレオタイプなフィクション先行になりがちな雰囲気があるように思えます。こうした状況をどう思いますか。

事実として、そういったステレオタイプの理解は存在する。それを逆手にとって人気を博すタレントも最近が多い。ただ、昔は気持ち悪いモノというレッテル張りをして、それをネタにするような扱いが多かったが、最近は現実にだんだんと寄り添ってきている部分も増えている。

- ⑨ セクシュアル・マイノリティに対する偏見や差別の問題を解決するためには、当事者の方々の努力だけではなく、それ以外の人達もこうした問題に関心を持つことが大切だと思うのですが、その「当事者ではない人達」が出来ることにはどのようなものがありますか。

まず、セクシュアル・マイノリティは左利きの人と同じくらいいる、どこにでもいる、ということを理解すること。その理解が一つ欠けることで、いつの間にか言葉でセクシュアル・マイノリティの人々を傷つける加害者になっていることがある。例えば、冗談のレベルでもセクシュアル・マイノリティについて差別するような発言をしていたら、その人にはカミングアウトや相談をしようと思えず、途端にその場所が息苦しくなる。また、同窓会で昔は女性だと思っていた友人が、再会した時には男性に変わっていた場合に、「何で言ってくれなかったのか」など、その人が言わなかったことが悪いような言い方をされてしまうことがある。先に述べたようなカミングアウトをしにくい状況が期せずしてつくられてしまうことがあるような状況を分かった上で、「今言ってくれてありがとう」と言ってほしい。

次に、何でもかんでも男性はこういうものであり、女性はこういうものである、という二元論にしないこと。二元論にしておいたほうが、人を判断するときには楽なのではないか。しかし、その二元論で苦しんでいるのはセクシュアル・マイノリティの人々だけではない。男らしさを求められる男性も、女らしさを求められる女性も息苦しいのは事実とし

であるのではないか。手芸が好きな男性がいたって良いし、武道が好きな女性がいたって良い。決してセクシュアル・マイノリティの人々は特別視されるようなものではない。ジェンダーという型にすべてをはめ込もうとする時に生じる問題という文脈の中に、セクシュアル・マイノリティの問題はあるのではないか。セクシュアル・マイノリティの人々が住みやすい世の中は、必ず異性愛者にも住みやすい世界であることは間違いない。型にはめられる苦しみを取り除く、という考え方をすれば、結婚する・しない、子どもを産む・産まないの選択をそれぞれが個人の自由で行えることにも繋がる。

さらに、少子化の原因として同性愛者の存在が挙げられることがあるが、その理屈は成り立たないということを理解することも重要である。少子化を防ぐためには子どもを生みたいと思う人が産めるような社会を作ることが先決。同性婚が増えることで同性愛者が今後増えていくというわけではない。日本では親子の血縁関係がかなり大きく評価されるが、子どもを育てられない人が無理に育てるのではなく、育てられる人が育てるべき。ゲイ・ファーザーやレズビアン・マザーとして、親のいない子供の里親になる例は存在するし、おかしなことではない。

⑩ セクシュアル・マイノリティの当事者ではない人達に、「これは知っていてほしい」「わかっていてほしい」と思うことはありますか。

例えばゲイの人と異性愛者の男性とを引き合わせると、異性愛者の男性が自分は恋愛対象として狙われているのではないかという感情を過剰に持ち、気負ってしまうことがある。これはレズビアンの人と異性愛者の女性を引き合わせた時も同じで、勿論そうであることもあるだろうが、全ての人がそうではないということをきちんと知っておいてほしい。この点は、異性愛者の男女がいつも異性を恋愛対象として狙っているわけではないことと同じである。こうしたセクシュアル・マイノリティに対する無知から、垣根を作ることはしないでほしいとのことだった。

### ・インタビューを行って

今回、セクシュアル・マイノリティ支援の団体へインタビューを行おうと考えた理由は、私自身フィクションの世界でしかセクシュアル・マイノリティの人々について知らなかったためである。八番目の質問にあったようなBL、百合などは、漫画、アニメ、小説、ゲームなどのフィクションの世界には当たり前のように存在する。しかし、日常生活で同性愛はいつそ不自然なほどに表に出てこない。現実的な知識として、日本にはセクシュアル・マイノリティの人々は人口全体の十パーセント程度存在するという事は知っているが、自分はフィクション先行でしかセクシュアル・マイノリティの人々を見たことがない。その知識のギャップを埋めるために、今回の課題がよい機会となると考えた。そして、L-port の工藤さんはじめ計三名の方に、当初は三十分の予定だったところ一時間ほどもお話を伺うことが出来た。改めて感謝を申し上げる。とても濃い、実りのある時間だったように思う。質

問書として送付させていただいた十個への回答のみにとどまらず、セクシュアル・マイノリティの当事者の視点から様々なお話を聞かせていただいた。中でも、セクシュアル・マイノリティの人々にとって住みやすい世界は、マジョリティである異性愛者にとっても住みやすい世界であるはずだ、というお話が印象に残っている。誰でも多かれ少なかれ、型にはめられることによる苦しみは味わったことがあるのではないだろうか。苦しみ、という大げさなものではなくても、勝手にイメージを押し付けられてしまったり世間の目を気にして自分を抑え込んでしまったりするようなことでもよい。男はこう、女はこう、大人はこう、子どもはこう、と型にはめておけば大概失敗はせずに済むが、それは判断する側の理屈である。判断される側はたまったものではない。世間一般の“普通”に自分がそぐわない、間違っているとレッテルを張られるのは、存外辛いものである。それを理解して人と接することで、少なくとも自分、もしくは他の誰かを安心させてあげることは出来るのではないだろうか。どうしたらもっと生きやすい世の中になるのか、という問いに答えるヒントがここにあると思う。

最近、日本では渋谷区のパートナーシップ条例の制定、世界ではアイルランドの同性婚合法化、アメリカ最高裁での同性婚禁止の違憲判決など、徐々にセクシュアル・マイノリティ容認の動きが強くなってきている。セクシュアル・マイノリティの人々を取り巻く環境はこれからもゆっくりと時間をかけて変わっていくだろうが、それは決してセクシュアル・マイノリティの人々だけに関わることではない。世界はマジョリティだけでできているわけでもなければマイノリティだけでできているわけでもないのである。それを肝に銘じてこれからの生活を送っていきたいと思う。